

博士論文要旨

本稿は主として日系移民の歴史において従来の語りとは異なった歴史、或いは排除されてきた日系移民の歴史を考察する。本稿はこれにより、従来の国際文化学の定義上、今まで十分に議論されてこなかった下位におかれた移民に注目することで国際文化学に貢献することを目的とする。人の移動を伴うグローバル社会で、マイノリティーへの抑圧が断続的に行われている。日系移民への抑圧に注目することは国際文化学という学際的研究において大変重要である。今もなお日系移民への抑圧は、自己の文化による他者の文化（マイノリティーの文化）の管理や同化によって推し進められている。本稿ではこうした抑圧と管理の事例として、アメリカ多文化社会の中で語られてきた日系移民の歴史に注目する。また、日系移民の歴史において語られることがなかったツールレイク強制収容所と、そこでの被収容者のインタビューを分析することで、アメリカ多文化主義の問題を明らかにしていく。

第1章では国際文化学の概論を説明し、現在までの国際文化学の定義では、よりミクロな視点が不在となっていることを明らかにする。抑圧された人々をミクロな視点から研究することが国際文化学において重要なパースペクティブになる。本章では、従来の歴史において語られることがなかった日系移民への抑圧に注目することで、本稿が国際文化学に貢献することを明らかにする。

第2章ではヘーゲル、フクヤマ、タカキの代表的著作『歴史哲学講義』『歴史の終わり』『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』を中心に、「ナショナル・ヒストリー」と「多文化主義に登場する日系移民の問題」を扱う。本章では、ヘーゲルの「理性的人間と歴史」についての記述と、フクヤマの「理性的人間による認知を求めた闘争」との記述を詳細に分析し、彼らが国民的な語りから歴史を構築していったことを批判する。次に、タカキのアメリカ内部のマイノリティーに関する語りに注目する。ここではタカキの歴史記述が、国民を生産すると同時に、国家の物語を生産してきたことを批判的に検証する。具体的にはタカキによる日系移民についての語り、彼/彼女らがアイデンティティーの葛藤に陥ることなく、「善き移民」として語られていることを批判する。本章では、ヘーゲルとフクヤマの記述は最終的にはタカキの歴史叙述によって、全てのマイノリティーがアメリカに貢献する物語として語られていることを批判する。タカキの記

述は、ネーションの物語が色濃く残されており、その語りの中では国家への貢献という形でマイノリティーが統合されている。タカキのアメリカ史の記述において、アメリカの多文化主義に登場する日系移民が一方的に語られ、アメリカ内部で統合されてきたのである。本章において、タカキの歴史言説や一見日系移民の歴史と関連付けられないヘーゲルやフクヤマを批判するのは、多文化主義言説に内在するネーションの概念自体が決して新しい概念ではなく、ネーションをより強固にするための新たな装置（代替装置）であったことを明らかにするためである。

第3章では、善良な「日系アメリカ人」が生産されてきた一方、そうした歴史から排除されている人々に注目するため、日系移民のサバルタンの歴史に注目する。まず日系移民の多様性に注目した二つの小説、オカダの *No-No Boy* とファンケの *The No-No Boys* の文学作品に注目する。オカダの作品は日米でも有名で日系移民の複雑なアイデンティティーの揺れに注目した小説である。一方、ファンケの作品は、本稿の中心的な議論となるツールレイク・キャンプを舞台にしており、小さな出版社から発行されている小説のため、今まで日本でもアメリカでも全く注目されてこなかった。この二つの小説にみる多様なアイデンティティーに注目して分析する。二つの小説はナショナル・ヒストリーにおいて語られることがなかった日系移民のアイデンティティーの多様性について描かれている。従来の歴史において語られない人々がいることを更に検証していくため、次節ではサバルタン論を援用する。

サバルタン論は社会的被抑圧者と彼/彼女らが置かれている状況に焦点を当てた理論である。まずサバルタンとは何か明らかにし、次にサバルタン論が、支配者/被支配者、抑圧者/被抑圧者といった二項対立に潜む権力関係を明らかにしている点を説明し、更にこれらの権力関係から全米 10 カ所に設置された日系移民の強制収容所の中で語られることがなかったツールレイク・キャンプに注目する。

ツールレイク・キャンプに関する断片的な資料を、現地（カリフォルニア州）で収集し、資料と人々の証言からこれらの歴史を整理し、分析する。ツールレイクは 1943 年強制収容所から隔離強制収容所となったことから、隔離収容所の歴史を再考する。ツールレイクが設置された要因だけでなく、収容所内の構造、収容所内の生活等を明らかにする。ツールレイクはアメリカ政府が日系移民に対して行った忠誠心調査と関わりが深いことから、忠誠心調査とツールレイクとの関係についても考察する。本章ではアメリカの多文化主義において語られることがなかったツールレイクのサバルタン史を記述する。

第4章では、歴史的に排除されている日系移民に注目するためにはオーラル・ヒストリーが重要であることを明らかにする。本章の冒頭ではオーラル・ヒストリーの方法を紹介する。オーラル・ヒストリーの目的と方法を明らかにし、トランスクリプションといった質的研究の調査方法について述べる。これらの研究方法によって、次章ではツールレイク収容者のインタビューを分析する。

第5章6章7章では、ツールレイク収容者のナラティブを紹介する。ここでは、それぞれの主張をできる限り叙述し、それぞれのインタビューを通して、ツールレイク収容所に関する歴史を紹介する。実際に3名のツールレイク・キャンプ被収容者の証言を用いる。ツールレイク・キャンプと忠誠心調査との関係、ツールレイク収容所の実態、ツールレイク収容者のアイデンティティーの問題、ツールレイク収容者が解放された後の排斥と抑圧、言葉の問題についてのナラティブを紹介し分析する。多文化史やナショナル・ヒストリーにおいて語ることがなかった日系移民の多様なアイデンティティーと歴史に焦点を当てる。

第8章では、第4章のツールレイクのサバルタン史と第5章6章7章の証言から、多文化主義の問題を扱う。本章ではアメリカの多文化主義言説の問題を明確にし、多文化主義言説に登場しない彼/彼女らの声から、日系移民が戦後、多文化社会の中で国民国家による忠誠/不忠誠としてのレッテルを貼られてきたことを明らかにする。ツールレイクの歴史と彼/彼女らの証言から多文化主義を考察することで、日系移民が多文化主義言説の中で十分に語られなかったことを明らかにし、多文化主義言説において、善良な国民として日系移民が「日系アメリカ人」として創造されてきたことを明らかにする。

第1章から第8章をとおして、アメリカ多文化主義の中で語れてきたナショナル・ヒストリーに登場することがなかったツールレイクの歴史を再考する。アメリカ多文化社会の中で語られることがなかったツールレイク強制収容所と、被収容者のインタビューを分析することで、アメリカ多文化主義の問題を明らかにしていく。